

## シャロレ伯爵 (1)

リヒャルト・ベア = ホフマン著  
松川 弘\*・訳

(平成28年10月31日受付)

### Der Graf von Charolais (1)

von  
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen  
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 31, 2016)

#### 登場人物

シャロレ伯爵  
ロモント大尉  
ロシュフォー (国会裁判所の裁判長)  
その娘デジレー  
その老乳母バルバラ  
フィリップ (ロシュフォーの被後見人, 甥)  
ロシュフォーの書記  
裁判官  
宿屋の主人  
その妻  
その父  
その女中  
飾り布の仕立屋 (故シャロレ伯の債権者)  
粉屋 (同)  
赤毛のイーツイヒ (同)  
二人の音楽師  
シャロレ伯爵の二人の下僕  
裁判長の老下僕  
仮面の老人  
二人の娼婦  
仮面のカップル  
二人の廷吏

裁判所の書記

裁判官たち, 書記たち, 二人の楽士, 群衆

所は, 数百年前のブルゴーニュの首都。

第三幕と第四幕のあいだは, 三年が経過している。

主要人物の名前および筋の前提条件は, フィリップ・マ  
シンジャーがナタナエル・フィールドと共同で執筆した古  
い戯曲から取られている。その戯曲『呪われた持参金』は,  
一六三二年にイギリスで出版されたもので, ドイツ語訳は,  
一八三六年にライプチヒのブロックハウス書店から出され  
た。

#### 第一幕

宿屋の二階の広間。

壁には何の飾りもなく, 漆喰がはがれ落ちている。広間  
の左隅は, ひどい造りの暖炉で切り取られている。

暖炉に隣り合って, 背景では, 二つのドアが部屋に通じ  
ており, さらに第三のより大きなドア——入口のドア——  
が控えの間に通じている。入口のドアの左側は, 壁がんに  
なっていて, その中にランプが置いてある。

右の壁では, 入口のドアのすぐそばに, 狭い通路がみえ,  
その一部が, 輪で吊られた擦り切れたカーテンでふさいで  
ある。壁の中央で, 木の手すりの付いた (荒削りのレンガ

\* 広島工業大学工学部電気システム工学科

の) 階段が、宿屋の人々の部屋に通じている。このドアの両側の壁には、ねじ曲がった壁燭台があり、ロウソクが燃えている。前景の壁ぎわに、くたびれた絹のカーテンと天蓋付きの寝台が置いてある。その前に高い腰掛けがある。

左の壁では、広い窓が階段に通じている。

前景の左手に、長い田舎風の宿屋のテーブルが置いてある。その前後に、それぞれ長椅子がある。右手には、重いひじ掛け椅子がある。その椅子の上には、破れて詰め物のはみ出したクッションがのせてある。部屋のドアのあいだ、背後に、汚れた錫の食器と食べ残しがのったテーブルがみえている。天井から、多枝の石油ランプが吊り下げている。

部屋は薄暗い。閉めた雨戸の隙間からは、朝の日の光が差し込んでいる。宿屋の主人の父が、寝台で体を起こす。彼は、寝台の縁に腰掛けて、腰掛けの上ののっている衣服と靴を取り、それらをゆっくり身につける。

ロモント：

(皮ひもでからげた包みを手にして、入口のドアを押し開け、敷居に立って呼びかける。)

おい！ 宿屋！ 畜生め！ 誰もいないのか？

(部屋の中にはいる。)

ドアは開いているのに、誰もいない！

どこへいったんだろう？

(窓際に駆け寄り、通りすがりに、包みをテーブルのうしろの長椅子の上に放り投げる。雨戸をはね上げて窓を開け、下に向かって叫ぶ。)

すぐ行くからな！

奴を押えててくれ！

いつもはおとなしいんだが、蠅がわずらわしいんだろう！

宿屋の主人の父：

すぐに人を呼びますから。

ロモント：

(帽子とマントを脱ぎ、テーブルのうしろの長椅子に置く。)

やあ！ 亭主かね！

宿屋の主人の父：

いいえ、旦那！ 奴の親父ですよ。

ロモント：

急いでるんだよ！

朝の一時から出てきてるんだからな！

(手袋をはずす。宿屋の内儀が、エプロンを手にして、部屋から出てくる。階段を下りながら、髪をまとめる。)

宿屋の内儀：

一体どうしました？

宿屋の主人の父：

この旦那がこられて・・・。

ロモント：

内儀かね？

宿屋の内儀：

左様です！

ロモント：

見ての通りだ！

厩舎はあるかね？

(父親は服を着終え、立ち上がって、ロモントの声に聞き耳を立てる。)

宿屋の内儀：

(エプロンをつけながら)

ありますとも！

馬の世話をする下男もいますよ！

ロモント：

(手袋をベルトに押し込んで)

下に行って、すぐに馬の世話をしてくれないか？

それからこの俺の世話もね！

腹はへってないが、のどがカラカラだ！

それに急いでもいる！

宿屋の内儀：

かしこまりました！

(駆け出す。)

ロモント：

(ひじ掛け椅子に腰をおろし、長靴を脱いで、皮のしわを伸ばそうとする。)

このしわが、道々、気になって仕方がなかったんだ！

(耳をすまし、窓に駆け寄って、下へ呼びかける。)

おい、小僧！

待つんだ！

約束したはずだろう・・・。

(貨幣を投げあたえる。)

受け取れよ！

月末だから、もう一銭もないんだ！

(下の物音に耳をすます。)

俺が軍人だから、お前は俺のいうことをきいたのかい？

待てよ！

お前はいくつだ？

九歳って言ったっけ？

覚えておくんだ！

お前が九歳のとき、ロモントという大尉が、お前は見上げた奴だって言ったことをな！

まだ、九グロッシェン、別にお前にやってもいいくらいだ！  
（マントとサーベルをはずす。マントを長椅子の上に、サーベルをテーブルの上に置き、ひじ掛け椅子にすわって、長靴をはき、寝やすい姿勢を取ろうとする。そのあいだに、宿屋の主人の父は、寝台から夜具をはずして、それを窓際に運び、外へ垂らす。）

宿屋の主人の父：

（窓に向かって歩きながら）

構いませんか？

ロモント：

（目を開けずに）

何のことだい？

宿屋の主人の父：

寝具を、ここで風に当てたいんですが？

ロモント：

（少し怒って）

好きなようにしろよ！

少しそっとしておいてくれ！

（父は、窓際で寝具を広げ、ゆっくり前に進む。）

宿屋の主人の父：

以前に一度、お会いしましたね、旦那？

あなたはまだお若いようだが？

ロモント：

（不機嫌に）

何を言ってるんだ！

目が付いてるんだらう？

宿屋の主人の父：

目が見えないんですよ、旦那！

だから、お尋ねしてるんです！

ロモント：

（彼をチラッと見て、視線をそらせ、少し当惑しながら）

すまなかった。

知らなかったんだよ。

知ってたら・・・。

宿屋の主人の父：

あなたの声には、聞き覚えがあるんです。

先程、下に向かって呼びかけられたとき、自分はロモントだって、おっしゃいましたね。

私は、ロモントという名前の見習士官と知り合いでした・・・。

ロモント：

いつのことだ？

宿屋の主人の父：

（前に進みながら）

もう何年も前のことです！

ロモント：

（体を起こし、彼に鋭い視線を送りながら）

あんたの名前は？

宿屋の主人の父：

（さらに少し前に進んで）

フランツです！

ロモント：

（いらいらして）

「フランツ」！

「フランツ」だって！

フランツなら何人も知っている！

あんたは、どこでその見習士官と知り合いだったんだ？

宿屋の主人の父：

連隊で、私が従軍酒保商人だったときに・・・。

ロモント：

（人のよい笑いを浮かべて）

違うなあ！

あんたのことは知らないぜ！

「毒殺のフランツ」！

宿屋の主人の父：

あなたが私をそうお呼びになるからには、ご存知なんでしょう・・・。

ロモント：  
悪気はなかったんだよ！

宿屋の主人の父：  
(低い声で、息せき切ってしゃべり出す)

みんなが私に不正を働いたんです！  
駐屯していた村で、奴らは、まだ熟れていないスモモの実を木からもぎ取ったり、夜に、チーズ製造所から乳清を盗んだりしました。

おまけに、私のワイン、上等で高価なワインまでも盗んでいったのです。

すべてが私のせいにはされました！

あのとき、将軍が、ご自分の手で、奴らから私を救ってくださったらなかったら、私はきっと、奴らに殴り殺されていたでしょう！

ロモント：  
(笑いながら)

そうだ、奴らはあんたに不正を働いた。  
澄んだ、混じり気のない水がただで手に入る限り、あんたは、自分のワインに毒を混ぜるような人じゃなかった！

そうだろう！

あんたのソーセージは・・・。

宿屋の主人の父：  
私のソーセージは、旦那のお気に入りでしたね。

ロモント：  
その通りだ！

あの頃、俺の口に合わないものなんてあったらどうか？

俺は、若造だった。

朝から晩まで腹ペコで、陽気だった！

宿屋の主人の父：  
ええ、そうでしたね！

ロモント：  
あれから何年たつか、分かるかい？

宿屋の主人の父：  
そう、十年か、十一年・・・。

ロモント：  
十年だって？  
この秋で、十六年だよ！

宿屋の主人の父：  
何てこった？

ロモント：  
数えてみるがいい！

あの老公が——あの人が生きていたら、事態は変わってたろうが——再婚して、軍の代表が宮廷に派遣されたのが、十六年前の秋のことだ。

俺も、最年少で同行したんだ。

そう、俺たちが宿舎から馬に乗って出たとき、あんたの倒れた荷車が、道をふさいでいたんだ。

奴らはまだ外にいて、あんたを殴り殺そうとしていた。

俺は、将軍の言いつけでやってきたんだ。

彼が死んだのは、あんたも知ってるだろう。

宿屋の主人の父：  
(突然振り向く)  
死んだって？  
誰がです？

ロモント：  
あの将軍だよ！

宿屋の主人の父：  
シャロレさんが死んだんですか？

ロモント：  
あんた、知らなかったのか？

宿屋の主人の父：  
知らなかった！  
(軽くよろめく)

ロモント：  
どうしたんだ？  
ともかく座りなさい。

あんたがそんなに動揺するとは思わなかった。

宿屋の主人の父：  
(宿屋の人々の居室に通じている階段に座り込んで、うなだれる)

あの人は、私より二十くらい若いのに死んだ！

健康で、私より若かったのに！

あの人のことはよく知っていたから、そりゃ、私にはひどいショックですよ。

私は自問してみたんです。

みろ、お前はずっと年上で、身体も弱っている。  
明日にもお迎えがくるかもしれないぞ、ってね。  
でも、明日になれば、私のようなしぶとい年寄り若い者より長生きするんだって、すなおに喜ぶんでしょな。

あの人死んだんですか！  
お気の毒に！  
どこが悪かったんですか？

ロモント：  
(不機嫌に、さげすむように、そっぽを向いて話を聞いている)

どこが悪いだって？  
悪くなんかあるものか！  
元気過ぎるほど元気だったんだ！  
小さくて丸い鉛の玉をしこたま食らい込むまではな！

宿屋の主人の父：  
撃ち殺されたんですか？

ロモント：  
(そっけなく、きっぱりと、細部には触れずに)  
そうだ！

宿屋の主人の父：  
ずっと前に？

ロモント：  
(同上の調子で)  
違う！  
三日前の今ごろは、まだ生きていた。

宿屋の主人の父：  
(体を起こして)  
ええ、でも今は平穏ですよ。

ロモント：  
(同上の調子で)  
そうだ。  
彼が射殺された日は、平穏そのものだった。  
(ゆっくり窓際に歩み寄り、外を見る)

宿屋の主人の父：  
ええ、でも一年前から戦闘は止んでいますね。  
だから、もうあちこちで撃ち合いがあるということはないでしょう？

ロモント：  
違う！

宿屋の主人の父：  
じゃあ、なぜ彼は撃ち殺されたんです？

ロモント：  
(振り返らず、ぞんざいに)  
理由は誰か他の者に聞いてもらいたいよ！  
俺は話したくないし、そのことについては何も考えたくないんだ。

宿屋の主人の父：  
(不満そうに、ムツとして)  
一言一言、そんなにじらさないでください！  
あのお気の毒な将軍がなぜ亡くなられたのか、私はそれが知りたいんです。

ロモント：  
あんたもう一度ショックをうけていいのか？  
さっきみたいに？  
そんなに知りたいのか？

宿屋の主人の父：  
当然でしょうが？

ロモント：  
(彼を見つめ、しばらくためらってから、意を決して話し出す)  
取り決めで——このことは、あんたも知ってるだろう——

宿屋の主人の父：  
まだそれが変更されていなければ、存じてますが。  
(寝台の縁にすわる)

ロモント：  
(早口で、はっきりと、明確なイメージを与えようと努めながら)  
わかった！  
あの取り決めでは、我が軍と敵軍の宿営場所が決まっていたんだ。  
われわれの宿営場所——ここから馬で六時間ほど行ったところ——には、川が流れていた。  
そして、取り決めでは、川を下って水車小屋のあるところまで、向こう岸は敵の領分になっていた。  
しかし、その水車小屋から河口までは、兩岸とも、われわ

れの領分だった。

(テーブルの縁に腰を下ろす)

さて、水車小屋から約千二百歩ほど行ったところに橋があるんだ。

宿営場所の近くに浅瀬があるので、われわれは前から、この橋は使っていなかった。

先週、山の方で洪水があったことを聞き込んだので、將軍と三人の幕僚、それに俺は、浅瀬がどうなっているか調べに行ったんだ。

われわれがそこに行くと、向こう岸には敵の天幕が張られていた。

少尉が二人の兵卒を連れてあらわれ、自分は、浅瀬を渡る者があれば射殺せよという命令を受けている、と叫んだ。俺は、「水車小屋からこっちは、われわれの領分だ」と叫び返した。

少尉は肩をすくめ、下を指し示した。

そこには、水車小屋が——恐らく——洪水に押し流されて、橋のアーチの下に引っ掛かっていた。

われわれは思わずカッととなった。

將軍は、鞍の上でわずかに身を起こして——俺にはまだ彼の声が聞こえるが——常のごとく、憎しみもなく、はっきりと叫んだ。

(声を荒げずに、はっきり、落ち着いて)

「少尉殿！思い違いでなければ、私が長年戦ってきた相手は軍人であり、私は、その軍人と取り決めを結んだのだ！取り決めたことは、誠実に守ってもらえると信じている！」言葉を続けながら、彼は、常歩で、ゆっくり浅瀬の方に向かって行った。

撃たれたのはそのときだ。

たった一撃だった！

(部屋の真ん中に来て、前を見つめ、声をおとして)

われわれが遺体を宿営に運び込んだとき、彼の天幕では、講和の使者が彼の帰りを待っていたんだ！

宿屋の主人の父：

講和の当日だったんですか！

それじゃ、今日が葬儀なんですね！

私も参列しなくては！

息子が連れていってくれますよ。

遺体はどこに安置されているんですか？

何を言ってるんだらう？

もちろん大聖堂ですよ！

若い大公が今おられないのは残念なことです。

代理で誰かが来られるでしょう。

葬送の行列は、どこの小路を通って行くんですか？

そんなに立派な葬儀は、これから二度と見られないでしょう！

ロモント：

(少し激して)

葬儀をせいぜい楽しみにしているがいいさ！

遺体が今どこにあるか、知っているのかね？

債務拘留の塔の中だよ！

債権者たちがそれを昨日差し押えたんだ。

宿屋の主人：

(自室のドアから首を突き出して、非常に早口で)

昨晚、三人の方がお見えになられて、シャロレの若旦那がお泊まりかどうか、尋ねていかれましたよ。

飾り布の仕立屋と、隣家の赤毛のイーツイヒ、それに川中島の二人の粉屋のうち年上の方の三人でした。

ロモント：

あんたは？

宿屋の主人の父：

私の息子です！

ロモント：

御主人か！

宿屋の主人：

(非常に愛想よく)

すぐ参ります！

まだ服を着ておりませんので。

(ドアを閉める)

ロモント：

思い出したぞ！

あんたの息子は歌手だったな？

テノールだったかね？

女性にとっても人気があったね？

三人か。

いや、もっと多くの御婦人方が、彼に首ったけだったんだらう？

そんなことを、あんたは俺たちに言わなかったかね？

宿屋の主人の父：

(小声で、打ち解けて)

奴は、あの声をすっかりなくしてしまいました。

元の主人の未亡人、さっき御覧になった、あのひどく若い金髪の美人を今から四年前に嫁にもらったんですよ。

ロモント：  
金髪？  
若い？  
俺がみた女は、黒髪で若くはなかったよ！

宿屋の主人の父：  
そんな！  
二十五歳で金髪なんですよ！

ロモント：  
金髪で若い？  
俺にはどうも分からん！

宿屋の主人：  
（擦り切れた、巾の広い、絹の部屋着をまとっている。愛想よく、しかし卑屈にならずに）  
—今まで聞いてたんですが— 親父はずっと前から伯爵様のことを尊敬申し上げていたんですな？

ロモント：  
俺は伯爵なんかじゃない。

宿屋の主人：  
でも、貴族なんでしょう。

ロモント：  
違う、ロモント大尉だ。  
それだけだ！

宿屋の主人：  
大尉殿は、貴族に列せられておられますね。  
その服は・・・

ロモント：  
大公の軍服か— わかった、わかった！  
お愛想はあとにしてくれ！  
聞かれたことだけ答えればいいんだ。  
（だんだん腹を立てながら）  
この町では、將軍の遺体が実の息子に引き渡されないうってことを、みんな知ってるんだらう？  
それで誰も憤激しないのか？  
そんな差し押えを求めたごろつきどもを、誰も打ち殺さないのか？  
それを許可した裁判所の眼鏡をかけた間抜けどもの鼻に、なぜインキ壺をぶつけようとはしないんだ？

宿屋の主人：  
憤激する？！  
平和になったので、みんな喜んでるんですよ。  
（ロモントは、腹を立ててそっぽを向く）  
それ以外のことには関心がないんでね。

宿屋の主人の父：  
差し押えって、どういうことなんです？  
よくわかりませんが・・・

宿屋の主人：  
—ずっと前から一度も適用されたことはないって話だが—  
死者が債務を残した場合、相続人が負債をすべて支払えないときは、債権者が遺体を差し押えることができるって法律があるんだ！

宿屋の主人の父：  
債権者がその遺体をどうするんだ？

宿屋の主人：  
それは彼のものになるのさ！

宿屋の主人の父：  
遺体にどんな価値があるんだ？

宿屋の主人：  
（少し考えて）  
そうだね。

息子なら誰だって、自分の親父の葬式をちゃんと出すために、出来るかぎりのことをするだろうさ。  
それが狙いなんだよ。  
（ロモントは、窓の方に聞き耳を立て、外をうかがう）

宿屋の主人の父：  
（しつこく）  
でも、先立つものがなければどうなるんだ？

宿屋の主人：  
（いらいらして）  
息子があとで財産を手に入れることが出来たら、彼は— 儀礼上— 自分の暮らし向きがいううちに、遺体を請け出さなければならないうってわけさ！  
老シャロレにも、他の貴族の旦那方のように、負債があったんだらう。

ロモント：

待ってくれ！

彼の負債は、あんたのいう負債とはわけが違う！  
実情を知らないお偉方が、兵士を養うのに不可欠な費用を——悠長に、それも半分だけ——認めるまで、彼は待てなかったんだ。將軍が自腹を切って、食料と衣服を俺たちに与え、賃金を払ってくれなかったら、戦争が起きる前に、俺たちは凍え、餓死していただろう！  
——名目上とはいえ——彼のこの国にたいする負債のおかげで、あんたたちは平和を手に入れることができたんだ。

彼の負債はそんな負債なんだ。

賭事や酒、馬や女、女郎屋の借金とはわけが違う！

宿屋の主人：

(気を悪くして)

女郎屋とは、人聞きが悪いですね！

ロモント：

彼は、女や女郎屋のためにお金を使ってはいない。

そう俺は言ったんだ！

勘違いするなよ。

してみると、あんたは女郎屋なのか？

どうだい、凶星かね？

宿屋の主人：

すみません、思い違いでした。

(女中が、ビールのジョッキと熱いミルクのポット、卵の皿をのせたお盆をもってあらわれる。彼女は、ロモントにジョッキを、主人の父にミルクのポットを手渡し、皿をテーブルの上に置く。)

ロモント：

ビールか？

女中：

(少し挑発的に彼を見つめながら)

そうですね！

(主人の父の方に行き、彼にミルクを渡す。父は、ベットの縁に置いてある腰掛けにすわって、熱いミルクを注意深く吹き冷ましながらかむ。)

ロモント：

(腰をおろしてビールを飲む)

どうして俺をそんな風に見つめるんだ？

女中：

いけないんですか？

あなたも私を見つめ返していらっしゃるじゃありませんか。

(主人の父に向かって)

気をつけてください、とても熱いですから！

宿屋の主人：

(かんしゃくを起こして)

俺の玉子は半熟だよ！

女中：

(手渡しながら)

私には手が二本しかないんですよ！

宿屋の主人：

おい、お客さんだよ！

女中：

はい、はい！

(右手の側壁に接している廊下に向かって走る)

宿屋の主人：

(彼女のうしろから叫ぶ)

中に入ってくるんじゃないぞ！

外から、こちらの希望を尋ねたり、自分の希望を言うだけでいい！

お前がこっちに運んできたものは、親父が中に運び入れるからな！

ロモント：

あんたは、盲目の寄るべない老人に、部屋の中で客の相手をさせるのか？

女中やあんたじゃ、いけないのかね？

宿屋の主人の父：

(ずるそうに微笑しながら)

私しか、だめなんですよ！

宿屋の主人：

(玉子の殻を注意深くむきながら、ロモントのうしろに回って、低い声で、なれなれしく)

ご存知のように、第三者が邪魔になるってこともありますよね。

——どう言ったらいいのか——ここにいることを知られたくない二人が——これはよくあることですが——この二人

がここでばったり出会うんですね。  
お分かりですか？

ロモント：  
ああ、分かったよ。

あんた、さっきはどうしてヤバって思ったんだね？

宿屋の主人：  
——残念ながら目は不自由なんです—— 親父が朝食を運んでいったら、お客さんを煩わせずにすみませし、本人とは知られないでしょう。

いかがです？!

ロモント：  
(さげすむようにそっぽを向いて)  
なるほどね。

女中：  
(戻ってきて)  
ブランデーとハムですね。

宿屋の主人：  
玉子と塩漬けの魚もだ、急いでくれ。  
(女中が引き下がる。宿屋の主人もあとに続く。)

宿屋の主人の父：  
(起き上って)

旦那、息子のことを悪く思わんでください。  
奴は、自分が個人的に知っている人だけに好意的なんです。宮廷のお偉方や大地主、若旦那たち、こうした方々は、みんな、私どもの宿で—— 朝食をとって行かれました。

奴は、あの方々をずっと前から存じあげておりました。あの方々が葡萄酒や穀物、干し草をお売りになるとき、奴はそれを斡旋して差し上げ、必要とあれば、お金を用立てて差し上げましたのです。

でも、奴がそれをしたのは、ただ、奴が時間を持て余しているからに過ぎなかったんです。

そんなことをする必要なんかなかったんですよ！  
女房が前夫から相続したお金と屋敷、それに家具調度一式があるんですから！

あの三枚の絵には、四千ドゥカーテンの値がついたんです。

四千ですよ！

奴はこれを絶対手放しません。  
これを見て、奴は楽しんでるんですよ。

ロモント：  
どんな絵かね？

宿屋の主人の父：  
あのドアの上に掛かっている絵ですよ。  
放蕩息子の物語です。

ぜいたくな暮らしをする息子、落ぶれて雌豚の番をする息子、故郷に帰ってきた息子が描かれているんです。

ロモント：  
どこにそんな絵があるんだ？  
(ブランデーの壺をもった主人と、料理の皿をもった女房が入ってくる。)

宿屋の主人：  
親父さん、早くしてくれないか。  
お客さんが待ちくたびれてるんだよ！

ロモント：  
おや、おかみさんだね！  
彼女のどこが金髪なんだ？

宿屋の主人：  
早く！

宿屋の主人の父：  
大尉さん、あんたは……。

宿屋の主人：  
早く！  
呼び鈴が鳴ってるんだ！  
廊下のなかのドアのところだ！  
(主人の父は、皿と壺をもって、右手の廊下に運んでいく。)

ロモント：  
俺は狂ってるのか？  
ご亭主！  
絵はどこにあるんだ？  
そこにいるあんたの女房は、金髪で若いのか？

宿屋の主人：  
(彼に近付いて)  
お願いですから、どならないでください！  
親父に聞かされたくないんです。  
どうか、親父には何も言わんでください！

宿屋の内儀：  
お父さんが気を悪くしますから。

ロモント：  
何をそんなに急き立てるんだ？  
俺にどうしろと言うんだ？  
こっちが気違いになっちまう！  
もう何も頼まんよ！

宿屋の主人：  
そんなことをおっしゃらずに！

ロモント：  
いやだね！

宿屋の主人：  
ごもっともです。

私が子供の頃、親父はいつも私に言っていました。  
「お前はひとかどの人物にはなるまい。乞食にでもなるんだろう」ってね。  
私が歌手になったとき、親父は私のことを誇りに思っていました……。

宿屋の内儀：  
当たり前ですよ！

宿屋の主人：  
こいつは私の歌を聞いてました！  
急に親父の目が見えなくなり、私は声を失ったんですが、こいつは私と結婚してくれたんです。  
——今は持ち直してますが——宿屋は、はじめうまくいきませんでした。  
私たちは親父を引き取ったんですが、自分たちの暮らし向きがよくないなんて、私が親父に言えるでしょうか？  
そんなことをしたら、親父は毎日、「それしろ、わしが予言していた通りじゃないか！」といて私を責めるに違いありません。  
それで、私は親父に、暮し向きはいい、女房は若くて金髪だ、お金目当てで彼女と結婚したんじゃないって言ったんですよ。  
だから、親父は、この家で私たちと機嫌よく暮してるんです。  
でも、老人に何も言いつけるわけにはいかないし、私も、

親父がまだ自分の予言は正しかったと信じているなんて思いたくないので、時には、親父に嘘をつくこともあるんですよ！

宿屋の内儀：  
この人のしたことを、誰が悪いといえるでしょう？

ロモント：  
いや、あんたは、あんたのやり方で、暮らし向きは悪くないと親父さんに信じてもらうことで、彼に敬意を払ってるんだね。

宿屋の主人の父：  
(戻ってきて)  
どうです？  
私の言った通りでしょう、大尉さん？

ロモント：  
その通りだ！  
彼女は金髪で若いし、絵は比類のないものだ。  
だが、今日は別のことについて、あんたと話し合いたいんだ。

宿屋の主人：  
どうぞ！

ロモント：  
ご亭主！  
俺は今日ここに一人で来たんじゃないんだ。  
俺の望みは……

宿屋の主人：  
(大袈裟に、懸命になって、早口で)  
どうか、もうそれ以上言わないでください。  
分かっていますとも。  
あなたはもう何もおっしゃる必要はありません。  
(窓のすぐそばのドアを指さす)  
この部屋には、邪魔が入りませんよ。  
(配膳台の引き出しを開け、黒い半仮面を取り出して配膳台の上に投げる)  
ここに仮面があります。  
ご婦人方は、外に出ると臆病になりますからね。